

学校評価の保護者アンケートの自由記述に「月1回くらいで学年通信、クラス通信を発行してほしい。行事予定、行事、試験、進路関係、クラスや生徒をほめる中身や生徒の声、先生の考え、社会のできごとなど」というご要望をいただいた。

教員になり学級通信を出したことがある方はたくさんいらっしゃると思う。一般的には、高校よりは中学校、中学校よりは小学校の方が通信やたよりを出す傾向にある。

私の場合は、教員になった1年目から学級通信を出していた。私がお世話になった学校では、学級通信を出すのが当たり前だった。その頃の私は、悪戦苦闘し、年間で20号くらいしか出せなかった。とりあえず出している、まわりの先生方が出しているから仕方なく出しているという状態で内容も恥ずかしい限りであった。中には、毎日学級通信を出している先生もいた。休み時間などを使って毎日手書きで書いていた。私は、そんな先輩の姿を見て「すごいなあ」という思いで憧れの気持ちを抱いたものだった。

どうにかこうにか教員1年目が終了し、2年目を迎えるにあたり、さすがの私も「これではいかん」という思いにかられ、張り切って2年目をスタートさせた。ところが、張り切った割には週に1回程度、年間50号しか出せなかった。3年目も横ばい状態でやはり年間50号ほどだった。

4年目から中学校に移った。すると、また手書きで毎日学級通信を出す先生に出会ってしまった。「中学校にもすごい人がいるんだ」とまた憧れの気持ちを抱くことになった。その先生と一緒に働くことができたのはたった1年間だけだった。3月末になり、その先生にお願いしてみた。「〇〇先生、先生の学級通信をいただけませんか」とすると、その先生は毎日出していた学級通信を丁寧に綴じたファイルを私にくださった。それは、今でも私の書斎（荷物置き場）に大切に保管されている。「学級通信『こぶしの花』」である。その先生は偶然にも私が最初に勤務した小学校に以前勤務したことがある方だった。「こぶしの花」はその小学校の校歌に出てくる。

中学校で学級担任となった私は迷いもなく学級通信を出し始めた。週に2回程度、年間100号である。最初から年間100号と決めていた。あの頃の私はまだ毎日出す勇気も技量もなかった。憧れの先輩方は、まだまだ遠い存在だった。結局この中学校にいる間はずっと年間100号ずつ学級通信を出すことができた。毎年製本をして生徒や同僚にも渡した。私の書斎には、「こぶしの花」の隣に「学級通信『薫風』」が並んでいる。実は、教員2年目に年間50号しか出せなかったときにも製本をしている。あまりにも薄くて背表紙に刻まれた「学級通信『かがやき』」の文字が小さかった。

その後は、学級担任をしないことが多かったが、再び5校目の中学校で学級担任をすることになり、学級通信をどうするか考えた。迷った。葛藤もあった。出した結論は毎日出すことだった。最初は正直不安であった。果たして続くのだろうか。だが、始めてみると、苦労なく毎日出すことができた。出すことが、学級通信をつくるのが楽しかったのである。楽しいことは続けることができる。教員1年目は楽しくはなかった。仕方なくやっているとなかなか続かない。

毎日出すと、年間200号を超える。やはり製本した。背表紙には再び「学級通信『薫風』」の文字が刻まれた。私の書斎には、「こぶしの花」「薫風」の他にもたくさんの製本された学級通信が並んでいる。私の製本された学級通信を手にした先生方が、その後自分の学級通信を製本し、私に贈ってくれるのである。ありがたい素敵な学級通信ライブラリーとなっている。

保護者のご意見、ご要望等からは考えるきっかけをいただくことができる。本校でも、学年通信は定期的に発行してもいいと考える。定期的というのは月に1回程度である。学期に1回では、とりあえず出しているにすぎない。ただし、ホームページもある。紙媒体での通信とホームページとの兼ね合いを考えながら次年度のことを決めていきたい。